

三者間自由会話における学習者の参与枠組み — 「話しかけられていない聞き手」から話し手へ—

川上 きよ美
アイオワ大学

要 旨

自由会話への参加は、学習者が当該言語の話されているコミュニティに入るための重要な要素となる。そのような会話の現場では、三者もしくは多人数での会話が多く行われる。本研究は、アメリカ中西部の大学に所属する学習者間での三者会話のマイクロアナリシスを行い、話し手として積極的に参加できている学習者と、聞き手にとどまった学習者の行動について考察した。その結果三者会話への参加は、言語能力よりも、聞き手としての行動や話し手としての会話技術によるところが大きいことが明らかになった。また、参加者の行動を決めるにあたり、各参加者が行使する成員カテゴリーと話題についての知識の有無が、二者会話の場合よりもさらに重要な要素となることが観察された。複雑な参与枠組みを示す三者会話への参加は学習者にとって困難を伴うこともあるが、本研究は、学習者が情報提供や話題転換等の会話技術を用いて積極的に多人数会話に参加することで、当該言語が話されるコミュニティ内での人間関係構築を目指すことができると提案する。

1. はじめに

三者以上が参加する多人数会話では、二者会話とは違った参与枠組みが観察される。例えば、話し手以外の参加者のうちの特定の一人が次の話し手になることは保障されていない。そのため、会話の参加者が進行中の会話にどの時点で参加するか迷う場面は少なくない。学習者同士の三者会話データを観察すると、活発に発話し言語使用の機会を生かしている学習者がいる一方で、あまり会話に入らずにいる学習者が見られる。中井 (2006)

も、接触場面の四者会話のデータを分析した研究の中で、学習者にとって多人数会話への参加は困難なものとなる可能性があることに言及している。当該言語が話されるコミュニティへの参加を目指す学習者が多人数会話に参加し、話し手として積極的な会話参加ができない場合、言語使用の機会が得られないだけでなく、コミュニティでの人間関係構築が進まない可能性がある。

母語話者・学習者の別に関わらず、会話研究は二者会話を調査資料として行われることが多く、三者会話や多人数会話を扱っている研究は少ない。本研究では、先行研究であまり扱われていなかった学習者同士の三者間自由会話を調査資料とし、会話に活発に参加できている参加者の事例とあまりできていない参加者の事例について会話データのマイクロアナリシスを行い、会話中に何が起きているかを明らかにする。三者会話特有の複雑な参与枠組みが二者会話よりも学習者の会話技術の使用状況をより明確に浮かびあがらせることも、本研究が三者会話に着目した理由である。

当該言語が使用されるコミュニティ内での社会的場面において、多人数会話に参加する機会は多い。本研究では、自由会話に自信を持って参加し、日本語が使用されるコミュニティにつながっていける話者を育成できる可能性についても、議論する。

2. 先行研究

高梨（2007）によれば、三者会話では、話し手以外の2人の聞き手のうちどちらが次の話者になるかは保証されていない。そこには Goffman（1981）が言うところの参与枠組み（*participation framework*）と参与役割の要素が関係している。高梨（2007）はその参与枠組みの中の参与役割である「聞き手」の概念には、様々な「地位」が含まれるとした。すなわち、聞き手が次話者として進行中の会話に参加するためには、まずは会話の傍観者ではなく「承認された参加者」、つまり会話の実際の参加者でなけれ

ばならない。また聞き手はさらに、実際に話しかけられている聞き手（addressee）と、話しかけられていない聞き手（side-participant）に分類される（Goffman 1981, Clark 1996）。例えば、話し手の視線が向けられていれば、その聞き手は「話しかけられている」可能性がある。

Sacks ら（1974）が提唱した話者交代ルールでは、現行話者が呼びかけなどにより次話者の指定を行った場合、指定された話者が次のターンを取るとしている。しかし、三者会話もしくは多人数会話においては、その話者交代ルールに沿わない例も発生する。初鹿野・岩田（2008）はその例として、三者会話において、選ばれていない参加者が指定された次話者を差し置いてターンを取る事例を観察している。

会話が進行している時に現行話者以外の聞き手がどのような行動をしているかも、三者会話の複雑な話者交代に関与する。榎本・伝（2004）は三者会話で、聞き手が視線を誰に向けているか、また話し手がターンを保持している間に二人の聞き手がいづちや笑いを出しているかどうかを観察し、それぞれの場合に次話者が誰になったかを調査している。

三者会話における話者交代のこのような複雑性に加え、中井（2006）が論じたように、学習者の場合、聞き取り能力や会話技術、および共有知識の不足により、多人数会話に積極的に参加するのが難しい場合がある。大場（2012）は、接触場面の三者会話において母語話者が、しばしば非母語話者が会話に参加する援助をしているのを観察しているが、学習者同士の三者会話では、そのような母語話者による援助は期待できない。

では、ここで問題になっている会話技術とは、具体的にどのような技術を言うのであろうか。中井（2012）は初対面の日本語母語話者の自由会話を分析し、初対面の自由会話で日本語学習者に必要とされる社会言語行動について論じている。そこでは、そのような社会言語行動として、話題提供や話題の展開、情報提供や情報要求、評価、提案、意味交渉等の言語行動が挙げられている（中井 2012）。また、中井（2006）は特に多人数会

話において、進行中の会話に参加する際、言語行動および非言語行動を用いて参加態度を他の会話参加者に表示する必要があることを述べている。Wong & Waring (2010) は、外国語教授法における会話指導の重要性を論じ、学習者に提示する必要がある「システムとしての」会話技術として、ターン取得、会話の開始・展開・終了、質問、話題提供と話題転換などの行動 (interactional practices) を上げている。本研究ではここに挙げたような会話参加者の行動を会話技術としているが、このような行動を実際に行使していくことは、学習者にとって困難を伴う場合があると考えられる。

一方大場 (2006) は、接触場面の三者会話について論じる中で、非母語話者の「話しかけられていない」聞き手としての行動を観察し、さらに当該会話参加者へのフォローアップ・インタビューをした結果、2人の母語話者の間で会話が進行中の場合、第三の参加者である非母語話者が「話しかけられていない」聞き手という参与役割を積極的に選択している事例を報告している。非母語話者が積極的に「話しかけられていない聞き手」という参与役割を選択している状況は、上述のような、非母語話者が会話技術の不足により参与役割を転換させることができずに結果的に「話しかけられていない聞き手」に結果的になっている状況とは、異なるものである。

また、Goodwin (1981) は、話し手が聞き手を、進行中の会話の話題について情報を持っている者 (knowing recipient) と判断するか持っていない者 (unknowing recipient) と判断するかによって、発話内容や会話の展開を変えていくと論じた。本研究の会話データでも、この差異が話し手の次話者選択に影響を与えているのが観察される。

さらに、会話における成員カテゴリーの重要性にも、留意する必要がある。西阪 (1995) は、Sacks (1972) の成員カテゴリー化装置の概念について論じ、会話の中でその話し手が社会的にどの役割 (成員カテゴリー) を果たしながら話すか、つまり何者として話すかが、話し手にとっても聞き手にとっても重要な要素であるとしている。西阪 (1995) はその例とし

て、教師が授業中に質問に答えるよう学生を指名し、その学生が「今ノートを読んでいます。」と答えた時、その教師は次の学生を指名し、その学生もそれが教師の当然の行為だと取るかもしれない、という事例を挙げている。三者会話においては、それぞれの参加者がどの役割を果たしながら話すかにより、次の話者や、ある発話がどの聞き手に向けられているかが指定されている場合があり、会話への参与枠組みにも影響すると考えられる。そのため、三者会話での参与枠組みを観察する本研究では、会話の分析を行うにあたり、必要に応じて、参加者が行使していると考えられる成員カテゴリーについても考察する。

なお、本研究では学習者の発話行動を観察するために、会話のマイクロアナリシスを行っている。岩田（2015）は、学習者のやり取りを記述する方法として、会話のデータについてマイクロアナリシスをするることについて論じている。岩田（2015）によれば、会話の様相は、一人の参加者の行動で成り立っているのではなく、相手の発話で共同構築されるものである。一つの発話は前の発話と直接連関するものとして出され、また同様に後続の発話と直接連関するものとして出される（岩田 2015）。特に三者会話に参加している学習者を観察する場合、会話への「参加の仕方」に注目する必要がある、そのためには会話データにマイクロアナリシスを行うことが有効であると考えられる。

3. データおよび方法

本研究の会話データ（6組、計3時間）は、米国中西部の大学の日本語会話テーブル「日本語上級サロン」で収録したものである。「日本語上級サロン」は、3年生の日本語コース（受講開始時における教室での学習時間300時間程度）と4年生の日本語コース（同390時間程度）の履修者および既修者を対象としており、週一回1時間学内のセミナールームに集まり、できるだけ日本語のみで会話するという活動である。参加者は日本語

コースで本研究の調査者の担当学生であるか、過去に担当していた学生である。上級日本語サロンの主催者である調査者以外の母語話者の参加はなく、サロンは日本語学習者だけの活動となっている。これは、本研究のデータを収録した大学がある地域には交換留学生等の日本語母語話者が非常に少なく、過去数年間日本語 TA も全くいないためである。

日本語サロンでは、会話の相手は毎回自由に決めさせており、学習者はその時に話したいトピックを自由に選んで会話をする。参加者は各回平均して 4、5 名で、4 年生の日本語コースの履修者の参加が多く、英語母語話者の割合は 5 割程度である。また、本研究で用いたデータの会話はすべて既知関係にある参加者同士のものである。既知関係による会話は、自分達についての基本的な情報を交換し合う初対面同士の会話や、会話進行中の役割がある程度固定している可能性がある友人関係による会話と異なり、より多様な参加が観察されると考えられる（大場 2006）。

本研究のために日本語サロンの参加者に 3 人で会話をしてくれるよう依頼をし、データ（各約 30 分）を収集した。その後その会話を文字化してマイクロアナリシスを行った。データ分析時に用いた記号については、添付資料を参照されたい。

マイクロアナリシスの記述および考察に当たっては、(1) 当該参加者の聞き手としての行動、(2) 当該参加者の話し手としての会話技術、(3) 会話参加者の成員カテゴリー、および (4) 会話参加者のその時々話題についての知識、の 4 点から参加者の参与枠組みを分析するようにした。

4. 三者間自由会話における学習者の参与枠組み

4.1 事例 1 <聞き手から話し手へと参与役割が変化した例>

この事例では、「話しかけられていない聞き手」が「話しかけられた聞き手」へと参与役割を変え、さらに話し手となって進行中の会話に積極的に参与していく様子を観察する。

下の抜粋 1 で、T、Z は日本語 4 年生を履修中のクラスメート同士であり、M は前年度に 4 年生を履修して 5 年生レベルの開講を待っている学生である。3 人の間に友人関係は特にはないが、日本語サロンに定期的に参加している既知関係である。この抜粋に至る前の会話で Z と M は、T が知らないあるゲームの話をしており、それに続く以下の抜粋で、Z はあるアニメ（マンガ）の話始める。

抜粋 1 : 「たくさん韓国のドラマを見て」

- 1 Z: さいきん:、この- (.) は:、何 (.) か- (.) か、 (.) よくわからないんですけど:-
- 2
- 3 M: =すごそう。
- 4 Z: すごそう。わ-わから-忘れてちゃった。レルカの: だい:- (0.2)
- 5 十三課 (.) かな。
- 6 M: レルカ?
- 7 Z: (.) 何ていう:、 (.) あ: エウレカ。ユウレカ。
- 8 M: あ: :、あ: あ: エウレカ。
((T は Z と M を交互に見ている))
- 9 M: アニメ (だったら) -
- 10 T: =私: は hh[h
- 11 M: [hh
- 12 Z: アニメ- (.) アニメの名前。
((T を見ながら))
- 13 T: あ: :。
((大きく頷く))
- 14 Z: エウレカ。 (.) エオレカ、エオレカですか。
((T を見る)) ((M を見る))
- 15 M: <エウレカ。 >
- 16 Z: エウレカ-
((T は Z と M を交互に見ている))
- 17 T: =°どんな英語を書きますか。°
- 18 Z: イーユーアールイーケーエー-エウレカ。
- 19 T: エウレカ。
((目をそらして考えている表情))
- 20 Z: はい。いい: : (.) アニメですけど: :、ちょっと長い。
- 21 T: あ: :。 ((うなずく))
- 22 Z: ご- (.) 五十: :、 (.) 五十巻。
- 23 T: そうか: 。
- 24 M: しかもセカンド・シーズンもある。
- 25 T: ふ: :ん。
- 26 M: 映画版もある。
- 27 Z: ま-
- 28 T: =私は今: : たくさんあの韓国のドラマ: [を見て: [:、

- ((M と Z の両方を交互に見ながら)) (写真 1 参照)
- 29 M : [あ :
- 30 Z : [韓国の
- 31 ドラマ。
- 32 M : あ : : 韓国の。
- 33 Z : 彼氏 h も一緒に hh[h
- 34 T : [シズンも : : 一つの : : 、 (.) シズンも : : 、
- 35 あります。
- 36 M : う : ん。
- 37 Z : ((咳払い))
- 38 T : それはちょっと悲しいと思いますけど : : 、あの : : 、物語が好き
- 39 ので-あの、みえ : : 、 () がありますか : : : 。ない。
((声音を変えてドラマの出演者の真似をしながら、手に汗握る
ジェスチャーをする))
- 40 M : 分かる。 (.) 分かる。
((胸に手を当てながら))
- 41 T : という[感じ : 。
- 42 M : [すげえ分かる。
- 43 T : そしてみんなは見ると、ちょっと、悲しいと思いますけど。
- 44 (.)
- 45 T : あの : : アメリカでは一人のシーズンの : : 、あの : 番組 : は :
- 46 あまり : ないと : 。

抜粋 1 に至るまでの会話では、あるゲームを知らない T に向かって Z と M がゲームの内容を交互に説明するが、その中で M が内容の一部を知らないことが明らかになる。そのため、Z はまず日本語で、それでも M がゲームの内容を把握できないことが分かったとさらに両者の母語である中国語で、M と情報共有を試みる。その過程で、中国語を理解しない T は、引き続き会話の参加者としてその場にいるが「話しかけられていない聞き手」(Goffman 1981) となり、発話も全くなくなる。これは大場 (2006) が指摘したように、三者会話がある話題について進行中に、Goodwin (1981) が分析した *knowing/unknowing recipient* (話の内容を知っている受け手と知らない受け手) という二種類の聞き手が同時に存在し得る事例と言える。そのような事例では、話の内容を知らない受け手は「話しかけられていない聞き手」となり、話の内容を知っている他の二人の参加者の間で会話が進行する場合がある (大場 2006) 。しかし Z と M は情報共有

できないまま、M が「中国語でも分からね (=分からない)。」と述べて、この話題での会話は三人の参加者の笑いで終了する。

それに続く抜粋 1 では、Z が「よくわからないけどすごそう」なアニメについて話し始める。1 行目の Z の発話では指示語「この」が使われているが、この指示語は具体的に何かを指し示していない。そしてすぐ後の発話で Z はアニメの題名について記憶が不確かであったため word search をするが、「この」はその前触れ (projection) であったことが分かる (Hayashi 2004)。4 行目からの発話で Z はアニメの題名の候補「レルカ」を出し、その候補は M によって「エウレカ」と修正される。

9 行目で M が「アニメだったら」と言いかけているのは、抜粋 1 に至る前の会話で Z とゲームについて話していた時には、M よりも Z のほうがゲームについての知識をより多く持っていたが、アニメである「エウレカ」については自分に知識があるという発話が続く可能性があったと考えられる。しかしその発話は、T の「私は」という発話にさえぎられる。

この T の完結しない発話を受けて、Z はその「エウレカ」という語がアニメのタイトルであるという情報を T に与えるが、題名の発音について確信が持てなくなり、M に情報提示を求める。15 行目で M が再度、前よりもゆっくり「エウレカ」と言ったのに続き、Z はそれを復唱するが、再びここで T が Z の発話を遮り、「どんな英語を書きますか」と尋ねる。ここでは、抜粋 1 に至る前の会話の連鎖で T が全く知らないゲームについて Z と M の間でやり取りが展開され、T がただその場にいるだけの会話の参加者となっていたのとは、異なる状況が観察される。以下に、対比のため、抜粋 1 に至る前の会話の連鎖部分を掲げる。

抜粋 1 の直前の会話

- 1 M : °俺ゲームやってない。°
(Z を見ながら)
- 2 (.)
- 3 Z : °そうですね : : ° (.) ディーピーエル-

- ((Mを見ながら))
- 4 M: -ディーピーエルないから。
- 5 Z: ホスト(.)とか: でもいいですけど。
- 6 M: え、何?ホスト?
((Tは二人を交互に見ている))
- 7 Z: 戦車か、ホースト。
- 8 (.)
- 9 Z: なんか、ホスト。((3秒間中国語))
- 10 M: ふ: : : ん。
((Zを見ながら))
- 11 Z: ((1秒中国語))
- 12 (0.4)
- 13 M: う: ん。(.) °わかんねえ。°
- 14 T: hhhhh[hhhhh
- 15 Z: [わかんねえって hhh 中国語[でもわかんねえって、
((Tに向かって自分を指さしながら))
- 16 T: [hhhhhhhhhhhhhhhhhhhh

このように、Tが L14 笑いを挟むまで、ゲーム「ホースト」もしくは「ホスト」について、ZとMのやり取りで会話が進行している。これに対し、続く抜粋1では、「(エウレカという言葉は) どんな英語 (のスペル) を書きますか。」と質問することによって T は、自分だけが進行中の会話の話題となっているアニメを知らないという状況の中で、背景知識がある Z と M からより詳しい情報を求めただけでなく、自分だけがトピックについて知らない聞き手であることを利用して、他の二者の間で進行していた会話に参加を果たしたと言える。この T の行動には、大場 (2006) が観察した接触場面の三者会話での非母語話者の行動との類似性も観察される。大場が観察した接触場面の会話では、母語話者 2 人が非母語話者が知らない話題についての会話を展開している中で、会話中に使用された聞きなれない単語を単にそのまま繰り返した非母語話者が、それをきっかけに「話しかけられている」聞き手へと転換していく。

さらに、T のここでの質問が、アニメの題名の英語の綴りについて情報を求めるものであることも重要であると考えられる。この三人の参加者の中で、T は唯一の英語母語話者である。三人の中で T だけが進行中の会話

の話題に対する知識がないという状況の中で、英語に関する情報要求を行うことにより、自分が英語母語話者であるという状況を使ってこの会話への参加を試みた、という可能性がある。

この後 T は「話しかけられている聞き手」からさらに、能動的な「話し手」へとこの会話での参与役割を変える。Z がエウレカの英語の綴りを T に教えた後、Z と T は協働して T にアニメ「エウレカ」が、セカンド・シーズンや映画版の存在も含めいかに長いかということの説明していく。その間 T は聞き手として、「あー」、「そうかー」、「ふーん」といった相槌を出していく。そして Z がさらに「エウレカ」についてのコメントを加えようとした可能性がある 27 行目に重なるような形で、T は M と Z の両方を交互に見ながら、「私は今たくさん韓国のドラマを見て」と言う。

写真 1 (抜粋 1、27、28 行目付近)



韓国のドラマを話題にしているこの T の発話は、ここまでの会話の話題がアニメ「エウレカ」であることを考えると、進行中の話題が収束しないうちに急に話題を転換しているように見える。この T の発話に対し、M は「あー」と T の発話を理解したことを表明しているものの、Z のほうは周囲の発話よりも強い音で「韓国のドラマ」と T の発話の一部を繰り返している。これは Schegloff ら (1977) が観察している他者修復開始 (other initiation of repair)、すなわち T の韓国ドラマについての発話に対し Z が発話のやり直しや追加説明を求める行動である可能性がある。

しかしその一方で、この T の発話にはいくつかの示唆があると言える。まず、早いテンポでやり取りする Z と M との三者会話において、T は、自分がよく知っている話題を自ら提供することによってここで初めて話し手になれたということである。大場（2006）が観察した接触場面の三者会話では、非母語話者の出身国に関する情報につき、母語話者が情報を求める形での会話がしばしば見られた。しかし、本研究が観察したこの学習者間での三者会話では、言語ホストとして参加を促す母語話者はおらず、T は自ら情報提供者となることで会話への積極的な参加を果たしたのである。

さらに、T は、長大なアニメ「エウレカ」についての話題が進行中に自らが行ったこの話題の転換を、再度、長大な映像作品という話題に戻す（refocusing）（Maynard 1980）ことにより、この会話の連鎖を一貫性のあるものにしていく。すなわち、上述のように「長いアニメエウレカ」の話題が進行中に韓国ドラマについての話題を開始するが、34 行目で、韓国ドラマも長くて 1 シーズンにわたることを言う。そしてそれに続き、韓国ドラマの場面を身振りも交えて紹介した後、45 行目でアメリカにはそのような長いドラマ番組はないと言う。すなわち T は、共に「長く続く」日本のアニメ「エウレカ」と韓国のドラマと、それに対する「長く続かない」アメリカのドラマという対比をここで完結させている。これにより、T は、アニメ「エウレカ」の話題が進行中に自らが出した「自分は韓国ドラマを見ている」という発話（28 行目）を、進行中の会話の連鎖から突出したものではなく、その中に埋め込まれたものとしたのである。

4.2 事例 2 <「話しかけられていない」聞き手の状態にとどまり、能動的な話し手に転換しなかった事例>

ここでは、会話中、発話がかなり少なく、「話しかけられていない」聞き手の状態にとどまり、能動的な話し手に転換しなかった例を取り上げる。B、Z、L は共に日本語コースに属する学生であり、B と Z は 3 年生の日本

語コースの、L は四年生の日本語コースの履修者である。3 人に友人関係はないが、B は日本語サロンの常連であり Z と L は時々参加するメンバーであるため、既知関係にある。

なお、L は旅行者として日本に 2 回滞在経験があり、この抜粋 2 では、まず日本への旅行の話題で、続いて日本のカプセルホテルの話題で会話の連鎖を開始している。一方、Z は近い将来初めて日本を訪れ滞在してみたいという希望を持っており、B はひと夏日本でインターンシップを経験し、さらに旅行目的でも数回日本を訪れている学生である。

抜粋 2：「私見たこともあります」

- 1 L: えっと:、日本:、なかで: :、どこに: 一番行きたいですか。
 - 2 Z: え: : :、((首を振る)) 京都:、や: 東京: : や:、
 - 3 広島: (.) が:、一番行きたい。
 - 4 B: ((うなずく))
 - 5 L: 広島: で: 原爆ドームが: ある:。
- <22行省略>
- 28 L: けど:、アメリカ人は、私達は、: そういうことしたから:。
((手で自分を指しながら)) ((B、顔を上げてLとZを交互に見る))
 - 29 とでも:、えっと:、ひどいな気持ち:。
 - 30 Z: ((うなずく)) 行ったことがありますか?
((ペンでLを指さしながら))
 - 31 L: 行ったことがある。二回。
((B、LとZの両方の顔を見た後、うつむく))
 - 32 Z: [あ: そう:。
 - 33 B: [((うつむいたまもうなずく))
 - 34 L: それは:、(.) この: : 夏休み:、二週間ぐらい:、名古屋:、
 - 35 と: 広島: に行きました。
((B、一瞬Lに視線を向けて、その後またうつむく))
 - 36 Z: ((何度もうなずく)) >好きですか。 <あ: : h もちろん hhh (写真2参照)
 - 37 L: でも一人で行ったから: ちょっとさみしくなる: -くなっちゃった。
 - 38 Z: ((何度もうなずく))
((B、携帯電話を取りだしてチェックする。その後、携帯電話をしまう))
 - 39 (.)
 - 40 Z: >楽しかったですか。 <
((B、顔を上げてLを見る))
 - 41 L: えと: :、(.) 楽しかった。
 - 42 Z: 楽しかった。
((何度もうなずきながら)) ((B、再びうつむく))
 - 43 L: えっと: :、カプセルホテルに泊まって、
 - 44 Z: °ホテル° ((考えている表情))

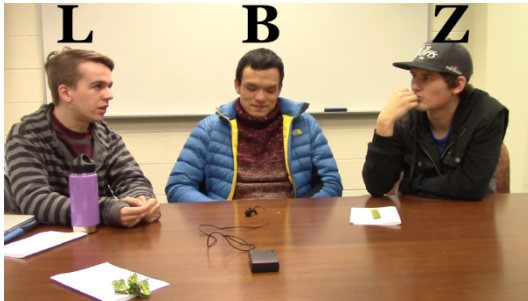
- 45 L : カプセルホテル。聞いたことがある？
(Z を指さしながら)
- 46 Z : [(首を振る)) (身を乗り出している)
- 47 B : [私聞いたことある。 (顔を上げて L に視線を向ける)]
- 48 L : えっと、多分、写真がある。
(携帯電話を取り出す)
- 49 B : °私見たこともあります。°
(L を見ながら)
- 50 L : ん？
- 51 B : 私見たことあります。
- 52 L : あ、でも- (B に対して、Z を指差すジェスチャーを見せた後、
携帯電話の中の写真を探し始める)
- 53 Z : 私も。
(自分を指しながら)
- 54 L : (うなずく) (1.0) カプセルホテルは : 、あ : 、 (0.3)
(携帯電話の写真を探す。B と Z は L が携帯電話を操作するのを見ています。)
- 55 Z : 有名
- 56 L : 有名 (.) かどう- (携帯の写真を Z だけに見せる) (写真 3 参照)
- 57 Z : あ : : 、capsule hotel.
- 58 L : やさしい : なえいご : :
- 59 Z : [yea:::h
(B に視線を向ける。B、自分の手元を見つめたまま微笑んでいる)
- 60 L : っと : : : 、そこで : : 泊まった。
(目を上げた B と Z に写真を見せる。)
- 61 Z : (うなずく)
- 62 L : ひどかった h
- 63 (.)
- 64 B : たぶん : : 、あまり : 安かった。 (B も Z も L を見ている)
- 65 L : 安かった、はい。でも : 、 (0.6) 寝られなかった。
(首をすくめながら) (B、うつむく)
- 66 B : あ : h。hhh。
(顔を上げて L を見る)
- 67 L : ちょっと : : : 、 (.) たくさん人がいるから : : :
- 68 Z : [(うなずく)
[(B、L の顔を見ている)]
- 69 L : みんなは歩く : : : 、私は一番下な : カプセル : 、ですから : :
- 70 Z : (何度もうなずく)
(B、うつむく)
- 71 L : ちょっと : : : crawl- (.) crawl hh した : : :
(両手を這うように動かす)
(B、それをちらっと見て微笑んだ後すぐうつむく)

抜粋 2 に至る以前の会話の連鎖の中で、Z は次の夏休みに日本に留学したいと言う。その Z に対し L は抜粋 2 の冒頭で、留学したら日本のどこ

を訪ねたいか尋ねる。京都や東京や広島に行きたいという Z に、L は、広島には原爆ドームがあることを教える。抜粋で省略されている 6 行目から 22 行目までの会話の連鎖では、L が原爆ドームについて、アメリカ人として「深い」気持ちを感じ、また気持ちが「ちょっと変になる」と、自分の感情をいくつものターンにわたって描写している。この間 Z は何度もうなずきを入れて、長大なターンで原爆投下に対する自分の気持ちを話す L を聞き手としてサポートしている。一方 B はこの間、聞き手としての反応を示すことなくうつむいている。L と Z はアメリカ人学生であり、B はアジア系留学生であることが、会話中のその部分の 3 人の参加者の行動を形成する重要な要素となっていることが考えられる。つまり、西阪 (1995) や Sacks (1972) が論じた成員カテゴリーが、会話のその部分の参加者達の行動に影響を与えている可能性がある。

これに続く 28 行目からの会話でも、B はしばしば「話しかけられていない聞き手」となっているのが観察されるが、ここではさらに複雑な状況での 3 人の参与枠組みが観察される。30 行目で Z が L に、原爆ドームに実際に行ったことがあるか訪ねたことで、会話の話題は L が夏休みにした日本旅行へと推移していく。そして、それまで顔を上げて L と Z に視線を交互に向けながら二人の間のやり取りを聞いていた B は、両者から視線を外してうつむき、その後 47 行目で顔を上げて発話するまで、話し手である L に視線をしばしば瞬間的に送る以外は、うつむいたままで発話も見られない。(写真 1 参照) 38 行目付近では、他の二人の会話参加者がやり取りを続ける中、携帯電話を取りだしてチェックしている。

写真2 (抜粋2、36行目付近)



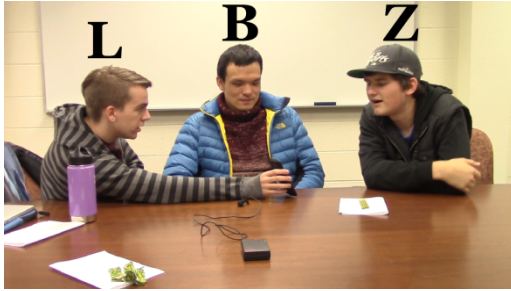
Bの参与枠組みに変化の兆しが見られたのは、Lがカプセルホテルの話題を展開し始めた43行目以降である。カプセルホテルという耳慣れない単語を聞いて、Zは小さな声で「ホテル」と繰り返しながら考える表情をし、Lによる先行発話の補修の促し (other speaker repair initiation) を行う (Schegloff et al. 1977)。この補修の促しを受けて、Lは45行目でカプセルホテルという語を繰り返すと共に、「聞いたことがある？」とZを指差しながら聞く。ここでも、Bはうつむいたままである。

しかし、この指差しによる次話者指定 (Sacks et al. 1974) が行われた後、Zと顔を上げたBが同時にターンを取る。そしてZのほうが首を振るジェスチャーでカプセルホテルという言葉聞いたことがないことを提示する一方、Bは自分は聞いたことがある、と述べる。ここでカプセルホテルについての語りやLによって開始されようとしている中、二人の聞き手がその話題について情報を持つ聞き手と情報を持たない聞き手であることが示されたのである。

ここからの会話の連鎖の中で観察される話し手Lの行動と二人の聞き手ZとBの行動は、複雑なものとなっている。48行目でLが、写真を見せようと携帯電話を取り出すが、Bが小さな声で「私見たこともあります。」と述べ、自分がカプセルホテルについて、その言葉を聞いたことがあるだけでなく、それ以上の情報を持っていることを示す。Lは「あ、でも」と言いながら unknowing recipient であるZを指差し、自分が携帯電話

の中の写真を探している行動の理由づけをする。そして、カプセルホテルの写真で Z だけに見せるという行動をする。(56 行目) (写真 3 参照)。

写真 3 (抜粋 2、56 行目付近)



そして L は、情報量が異なる二人の聞き手への対応を行おうとしているようである。Z だけにカプセルホテルの写真を見せた L は、Z がなぜその種のホテルが「カプセルホテル」と呼ばれるか理解した後、60 行目で「そこで泊まった」と言いながら B と Z の両方に (Z には再度) 写真を提示する。その写真の再提示は、「自分が実際に泊まったカプセルホテル」という付加情報を伴って行われたのである。抜粋 2 の会話の進行中うつむくことが多く視線を他の二人の会話の参加者にあまり向けない B も、会話のこの部分では顔を上げて L に視線を向けている。B が、発話は少ないながらも、会話の流れに注意を払っていることがうかがえる。

そして 64 行目では B は L に、「たぶんー、あまりー安かった。」と、追加情報を吊り出す発話をしている。この B の発話は質問の構文で出されてはいないが、「多分」という話者の推測を表示する語を付けて追加情報の候補 (低廉な宿泊料) を出すことで L の情報提供を促し、また発話のためらいを提示する音の引き延ばしを使うことで、自分のその情報へのアクセスが弱いことを示そうとしている。また同時に、付加情報の候補を出せるだけのレベルの情報を持っていることも提示されていると考えられる。そして L はこの追加情報の吊り出しに対応し、宿泊料が「安かった」と共に、「でも、寝られなかった」と、そのカプセルホテルでの経験

談を話し始める。しかし、ここからの会話の連鎖の中でも、B は時折顔を上げて L に視線を向けたり微笑むことはあっても、多くの場面でうつむいている。会話は主に話し手 L と聞き手 Z の間で進行し、B は再び「話しかけられていない聞き手」となっている。

最後に、抜粋 2 全体を通して B の発話あまり見られていないことは上述の通りであるが、発話内容にも注目する必要がある。それは、B の発話の一つ一つが短く、説明や例示など相手の理解を助ける部分を含んでいない点である。例えば、前述のように、43 行目から L が日本滞在中カプセルホテルに宿泊した話題が展開されるが、この話題に関し B は、自分がその名称を聞いたことがあること、そしてさらに、聞いたことがあるだけではなく、見たこともあることを述べる (47、49、51 行目)。この部分の会話の連鎖は、話し手である L が他の二人の参加者のうち Z を聞き手として選択している状態で進行しているため、B は聞き手としての自分の存在を話し手 L に提示する行動を取る必要がある。この三つの発話で B が行っているように「私」という一人称で発話を始め、L の注意を引く試みをすると同時に、進行中の話題に関する知識の保持状況が Z とは異なることを示そうとしていると言える。しかしこの時 L のほうは、自らが展開しているカプセルホテルの話題をもう一人の参加者である Z に理解させるために携帯電話の写真を探しだして見せるという行為の最中にあり、B の三つの発話は無視されたり、聞き直されたりする。これに対して、B は、「聞いたことある」、「見たこともある」、「見たことある」と、特段の変更を加えることなく類似の発話を繰り返すことのみで対応している。

5. 考察

5.1 「話しかけられていない聞き手」から話し手への転換ができている事例

事例 1 では、参加者 T が、他の二人の参加者と背景知識を共有しないため、「話しかけられていない聞き手」として三者会話の「傍観者」（高梨 2007）となっていたが、その後話し手へと転換する様子が観察された。T は本稿執筆者が担当した日本語コースでは日本語力が弱い学生であり、また自分の日本語会話の能力が低い、周りが何を話しているかわからない、という意識を持つ学生でもあった。T が三者会話において話し手への転換をなしえている要素として、次のような点が挙げられる。

第一に T が、自分以外の二人の参加者の間でやり取りが行われて自分が「話しかけられていない聞き手」になっている間も、常に顔を上げて他の二人の参加者達に視線を向けている点が挙げられる。また、抜粋 1 に至る会話の連鎖では、長い間 T の実質的な発話が観察されない間も、T が笑いを挟んでいるのが観察された。この T の笑いをきっかけに他の二人の参加者が T に視線を向けて話し、二人の協働する話し手と一人の「話しかけられている聞き手」という形に参加の枠組みが変わる。それに続く抜粋 1 でも、再び他の二人の間でやり取りが進行する中、T が「私は」と発話しかけたり、大きくうなずいたりしながら相槌を出す様子が観察された。このように、進行中の会話の参加者としての自分を提示し続け、それにより、続く会話の連鎖中で「話しかけられている参加者」へ、そしてさらに話し手へと参与役割を変えることが容易になったと考えられる。

次に、T は自分の成員カテゴリーも有効に利用して参与役割を変えていることが観察された。アニメエウレカの話題で、エウレカについて背景知識を持つ Z と M の間でやりとりが進行する中で、そのタイトルを英語でどう綴るか尋ねることは、参加者の中で唯一の英語母語話者であることを T が会話の中で実践している、つまり英語母語話者という成員カテゴリー

の表出（西阪 1995）である可能性がある。すなわち、話しかけられていない聞き手にとどまる可能性があった会話の中で、「英語母語話者として」の質問を提示することを通して承認されている聞き手へと変わることができたと考えられる。

最後に、T は進行中の会話の話題についての自分の情報量を利用しながら、会話への参加を果たしている。まず、自分が知らないアニメの題名を理解するために、英語でどう綴るのかを他の参加者に尋ねて、自分が持っていない情報を持っている他の参加者に情報を求めることで、会話参加の端緒を得ている。そしてその後、進行中の会話の話題を自分がより多くの情報を持つ話題（韓国ドラマ）に転換することで、自分が情報の提供者となり、話し手へと自身の参与役割を変化させている。さらにその後、上述のように、転換後の話題と転換前の話題を連結させて、会話の連鎖に統一性を与えている。

このように、T は情報要求や、会話展開および話題転換の技術を使うことで、話者交代システムが複雑になる可能性がある三者会話において、自分が話者として会話に参加できる状況を作っているのである。

5.2 「話しかけられていない聞き手」から参与枠割がほとんど変わらなかった事例

事例 2 では、事例 1 と対象をなす例として、会話の進行中多くの時間、「話しかけられていない聞き手」の状態にとどまった学習者の会話例を観察した。

まず、事例 2 の三者会話の進行中、他の参加者が話している間、B がうつむいていることが多く、他の二人の参加者と視線をあまり合わせないのが観察された。その一方、B の聞き手としての行動をさらに観察すると、視線をずっと下に落としていても、会話の流れや話し手の発話の内容を理解していることがうかがえる。例えば、会話の話題がカプセルホテルに移

った時に、自分はその言葉を聞いたことがあると言う発話を出しながら視線を話し手に向けている。しかし会話全体を通して他の二人のどちらにも視線を向けずにうつむいていることが多く、聞き手としての反応もしていないことが多い。上述のように、二者会話の状況と異なり、三者会話では、一人の参加者が話し手となっている時、他の二人のうちどちらの参加者が次の話し手になるかは不確定である。3人のうち2人の参加者が、話し手と「話しかけられている」聞き手として協働しながら会話を作りあげている時に、他の参加者と視線を合わせない、そして話し手の発話に聞き手として反応する発話もほとんど出さない第三の参加者が、参与役割を話し手に転換するのは、困難であると考えられる。

第二に、「話しかけられていない聞き手」であった B は、会話の話題が自分が背景知識を持つ事項（カプセルホテル）に変わった時に自分が知識を持つことを提示しようとしたが、その提示方法は話し手へと参与役割を変化させるための会話技術を含んでいなかったと言える。発話の開始部で相手の名を呼んだり、話し手の注意を自分に向けるための言葉（例：「あの」）を使用するといった、スムーズなターン取得の方法が取られていなかったのに加え、自分がカプセルホテルについて何を知っているのか、もしくは何を見たことがあるのか、話し手 L の反応を見ながら説明を加えたり例示をするなど会話展開の技術の使用が見られなかった。

さらに、どのような立場で発話を行うか（成員カテゴリー）が、参加者 B の場合明確でなく、それが参与枠組みにも影響した可能性がある。日本旅行を話題として会話が進行的中で、他の二人の参加者は、4年生の先輩であり日本に旅行した経験がある L と、3年生のコースに属し日本滞在経験がない Z というように、この会話に「何者として」参加するか（Sacks 1972, 西阪 1995）という枠組みが明確だった。そして会話中 L は Z を特定して質問したり写真を見せたりし、一方 Z は聞き手として、L の発話を聞いて考えている表情を見せたり身を乗り出して写真を見る等、二

者が協働して会話を形成している。これに対して、Zと同じく3年生であるBについては、会話前半では日本に行ったことがあるのかがはっきりせず、会話後半の「カプセルホテルを見たことがある」という発話から、日本に行ったことがあるということが初めて他の参加者に明らかになる。

それに加え、LとZの2人の間では、カプセルホテルの話題について、Lが知識を持ち情報提供する参加者であり、一方のZが知識を持たず情報を享受する参加者であるという関係が、会話中で明確になっていた。それに対しBは、「(カプセルホテルを)見たことがある」と述べ、そして「宿泊費が安かった」とLが付加情報を出す前にその候補を提示し、「カプセルホテル」に泊まったことはなくても一定の情報を持っていることをうかがわせているが、情報提供者となる様子は観察されない。また会話全体を通してBの発話が少ないため、他の二人の参加者から見ても、Bに対して情報を持つ参加者として扱うべきなのか、情報を持たない参加者として扱うべきなのかが明らかではなかったのではないかと考えられる。

このように、聞き手として会話に参加していることを提示するための反応の不足や、視線が他の参加者に向けられていなくてうつむきがちであること、話し手の注意を引いてターンをスムーズに取得したり会話を展開させていくという会話技術の不足、そして進行中の話題についての立場が明確でなかったこと、それらのすべてが総合的に影響して、Bが話し手として積極的に会話に参加していくことを困難にしたと思われる。

6. まとめ

本稿では、日本語母語話者が少ない地域での学習者間の活動で収録した会話データを分析し、考察した。上述のように、学習者にとって、話者交代システムが複雑な三者、もしくはそれ以上の多人数会話に話し手として参加していくことは、容易ではない場合がある。そして本稿で取り上げた

学習者のように、様々な理由により多人数会話でターンを取りにくい参加者が自由会話への積極的な参加をするには、ターン取得や会話展開、話題転換、情報要求などの会話技術の習得と使用がその助けとなる可能性があることが観察された。また、話し手と視線を合わせたり、あいづちや笑いを挟むことで、その時話している話し手に聞き手として意識されることが可能になり、その次の段階として、話し手としての参加もしやすくなる。さらに、事例1のように、話し手への質問を入れて情報要求を行い、それをきっかけとして会話を展開したり（川上 2014）、話し手に共感を表明したり（川上 2015）することで、進行中の会話の中でまず「話しかけられている聞き手」として、さらに続いて話し手として、会話参加者としての自分の存在を確立することが可能であると思われる。そして、三者会話における参与枠組みが決定づけられるにあたり、各参加者が行使する成員カテゴリーと話題についての知識の有無が、参与枠組みがそれほど複雑でない二者会話の場合よりもさらに重要な要素となることも観察された。

参与枠組みの複雑な三者会話に積極的に参加できる参加者となっていくことは、学習者の会話技術を向上させ、様々な場での会話に参加できる話者となることに役立つはずである。しかし、接触場面で会話する機会があまり持てない学習者の場合、日本語母語話者の会話への参加の仕方を学んだり、また大場（2012）が接触場面で観察したような母語話者による会話参加への助けを得る機会はあまりないのが現状である。本稿は、そのような地域で行われている日本語学習者間での活動について観察および考察を行い、同様の状況にある教育現場へと還元することを目指している。そのためにも、本研究で採用したプロセスに加え、会話データ収録後当該参加者と共にデータを見ながらインタビューを行い、その後再度会話を収録するという振り返りの段階を含めることが、今後の課題として考えられる。

* 本稿は、CAJLE2016年次大会における2016年8月18日の論文発表「三者間自由会話における学習者の参加形態についての一考察—言語使用の機会を生

かし他者とつながる日本語学習者の育成のために」に加筆・修正したものである。本論文の加筆・修正に際して、二名の査読者に加え、ケンタッキー大学の長谷川敦志氏に有益な示唆を頂いた。この場を借りて、深く感謝の意を申し上げる。

参考文献

- 岩田夏穂 (2015) 「学習者のやり取りを記述する方法：会話分析を日本語教育に生かす試み」 館岡洋子『日本語教育のための質的研究入門：学習・教師・教室をいかに描くか』 321-341 ココ出版
- 榎本美香・伝康晴 (2004) 「三人会話における聞き手のちょっとした振る舞いについて」 『社会言語科学会第 14 回大会論文集』 162-165 社会言語科学会
- 大場美和子 (2006) 「三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割—接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析—千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129」 『多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.4』 17-56 千葉大学
- 大場美和子 (2012) 『接触場面における三者会話の研究』 ひつじ書房
- 川上きよ美 (2014) 「学習者間の自由会話を通しての会話技術への気づきと向上の試み:多様化する日本語話者コミュニティー構成員への対応を目指して」 『2014 CAJLE Conference Proceeding』 46-55 Toronto, ON: Canadian Association for Japanese Language Education.
- 川上きよ美 (2015) 「共感の表明—会話を通じて社会的関係を構築できる学習者の育成のために教師ができること」 『2015 CAJLE Conference Proceeding』 107-116 Toronto, ON: Canadian Association for Japanese Language Education.
- 高梨克也 (2007) 「多人数会話における話者交代再考—参与構造とノンバーバル情報を中心に—」 『社会言語科学』 9(2), 106-111.

- 中井陽子 (2006) 「日本語の会話における言語的/非言語的な参加態度の示し方ー初対面の母語話者/非母語話者による 4 者間の会話の分析」『早稲田大学日本語教育センター紀要』19, 79-98.
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 西阪仰 (1995) 「成員カテゴリー」『言語』24(11), 104-109.
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2008) 「選ばれていない参加者が発話するときーもう一人の参加者について言及することー」『社会言語科学』10(2), 121-134.
- Clark, Herbert H. (1996). *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, Charles. (1981). *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Hayashi, Makoto. (2004). Projection of grammar: Notes on the 'action-projecting' use of the distal demonstrative *are* in Japanese. *Journal of Pragmatics* 36(8), 1337-1374.
- Maynard, Douglas W. (1980). Placement of topic changes in conversation. *Semiotica* 30(3-4), 263-290.
- Sacks, Harvey. (1972). On the analyzability of stories by children, J. J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Direction in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 329-345. New York: Hold, Rainhart and Winston.
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A., & Jefferson, Gail. (1974). A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696-735.
- Schegloff, Emanuel A., Jefferson, Gail, & Sacks, Harvey. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.

Wong, Jean, & Waring, Hansun Z. (2010). *Conversation Analysis and Second Language Pedagogy: A Guide for ESL/EFL Teachers*. New York: Routledge.

添付資料

会話データのマイクロアナリシスに使用した記号一覧

| | |
|-------|--------------------------|
| (.) | ポーズ、沈黙 |
| | 発話の重なりの開始 |
| :: | 音声の引き伸ばし |
| (()) | 注記 |
| () | 聞き取り困難 |
| > < | 発話のスピードが周囲の発話のスピードに比べて速い |
| = | 2つの発話もしくは語の密着 |
| - | 言葉の途切れ、カット・オフ |
| ° ° | 音声小さい |
| 太字 | 音声が大きい |
| 下線つき | 音声が低い |